

仲間と協力し合い、意欲的・主体的に取り組む体育学習のあり方

大分県佐伯市立鶴岡小学校

全校児童数	545名(男子294名 女子251名)		
全クラス数	21	教職員数	31名
体育専科教員訪問学校数			8校
訪問校	佐伯小、佐伯東小、明治小、上野小、切畑小 直川小、本匠小、青山小		
体育専科教員名		御手洗貴裕	

Plan：取組時の課題と計画

1 取組時の課題

- (1) 県平均に比べ男女とも50m走・上体おこし等が低い傾向にある。
- (2) 低学年のうちに身につけてほしい基礎感覚・用具操作能力の定着が不十分である。
- (3) 協力し合って「教え合う・励まし合う・助け合う」活動（話し合い活動）の定着が不十分である。
- (4) 振り返りで、お互いを認め合う・感謝し合う発表が少ない。

2 取組の計画

- (1) 児童実態の把握
- (2) 本校での各領域における指導（1～3学期）
- (3) 各学年との授業改善に向けての定期的な話し合い（2ヶ月に一度）
- (4) 訪問校における体育指導（1～3学期）
- (5) 児童へのアンケート調査を行い、運動への意欲・興味・関心を検証

Do：実践内容

1 運動量の確保

どの単元の授業においても、一人ひとりの子どもの運動量を意識して授業をくんできた。基本的な流れは以下の通り。

- (1) ウォーミングアップ
- (2) 補助運動
- (3) 主運動

2 場の工夫

以下4つの観点を意識して、場を設定してきた。

- (1) 子どもたちが興味をもてる
- (2) 子どもたちの実態に合っている
- (3) 安全である
- (4) 運動量を確保できる

3 友だちとの関わり

どの単元でも友だちとの関わりを大事にしながら、学習を進めてきた。

- (1) 水泳（水遊び）・・・バディでのペア学習
- (2) ボール運動・・・チームでの話し合い
- (3) マット運動（遊び）・・・グループでの協力
- (4) 体づくり（長なわ）・・・クラスで協力

等

●工夫したこと（&苦労した点）

(1) スモールステップ

どの子どもでもできる易しい運動からスタートして少しずつ難易度を上げるようにしてきた。そうすることによって、子どもたちは無理なく取り組み、「やってみよう」「できる気がする」という前向きな気持ちをもつことができたと思う。

(2) 見通しをもたせる

1時間の授業の見通しをもたせるため、ホワイトボードに流れを提示した。また、運動のコツやポイントを意識させ、取り組ませることができた。

(3) 子ども同士の関わり合い

ペア学習や教え合い、話し合いを積極的に取り入れてきた。関わりはもてたが、話し合いや教え合いの質を今後はもっと高めていかなければならない。

(4) 場やルールの工夫

運動量の確保、安全性、子どもたちが楽しめる、等の観点から場をつくってきた。また、既存のルールにとらわれない、学級（学年）の実態に応じたルールづくりを行うことができたと思う。

Check：取組の成果

- ① 高跳びの学習では、当たっても痛くないゴムを利用したり、高さの違う場を用意したりすることで子どもたちが安心して、意欲的・主体的に取り組むことができた。
- ② ボールを使った運動において、子どもの実態に即した場やルールにすることで、子どもがより取り組みやすい学習となった。

Action：今後の課題

- ① ICTの活用をさらに進めていく必要がある。
- ② 子ども同士の関わり合いの質や量を高めていく。

◎体力向上の取組がもたらす波及効果

○子どもが自信をもち、積極性や自主性が高まるなど他の学習や活動への好影響が考えられる。

基礎感覚づくり・補助運動



(左)「腕を振ってのゆりかご」

回転系の技の基礎感覚を養う運動。常にお尻を浮かすこと、腕を振るタイミングを意識させて取り組ませた。ウォーミングアップにもなる。

(右)「チョキ倒立」

チョキの形での倒立。片方を上げずに残すことでバランスがとりやすくなる。慣れてきたら少しずつ垂直に近づけるよう、止まっている時間を長くするよう声かけを行った。補助倒立や壁倒立につなげることができる。

場の工夫



「開脚跳び」

腰を上げることや助走のスピードに恐怖心がある子どもにとって大変有効な場の設定

別の跳び箱に乗せ、腰が高い状態から助走なしで跳ばせる。それでも恐怖心がある子どもには補助をしたり、セーフティーマットを前に敷いたりすることで恐怖心が緩和された。この場で跳べるようになると、普通の間でも跳べるようになる子が多く見られた。



「首はねとび」

柔らかい跳び箱、セーフティーマットを準備することで、安全面はもちろん、子どもたちに安心感を与えることができた。

友だちとの関わり・協力



「側方倒立回転」

ゴムに足が届けば、側転がより真っ直ぐになっている。子どもたちは横から見ながら、「もっと足を伸ばして」「さっきより、惜しかった」「届いた！」等、声をかけあう姿が見られた。



「高跳び」

授業の最後に、子どもたちが選んだ高さで跳躍を見合う場を設けた。うまく跳べた子にも失敗した子にも温かい拍手が送られていた。